

第4回男女別学教育シンポジウム

2015年5月23日（土）聖光学院中学校高等学校にて

基調講演「女子教育について」

吉野 明先生（鷗友学園女子中学高等学校校長）

皆さんこんにちは。鷗友学園女子中学高等学校の校長をしております吉野と申します。どうぞよろしくお願いいたします。今日は「男女別学シンポジウム—男女別学で子供は伸びる—」というテーマですが、私は「男女別学で子供を伸ばす」という表題で鷗友学園では、どのような教育をしているのかということを中心に別学の意味についてお話をしたいと思います。

先程、中井俊巳先生の方からも3回のシンポジウムについてのお話がありましたが、3回の中で今日の話に関連する印象に残った言葉からお話をしていきます。第2回目、2000年ですが、水谷弘先生という先生が公立の時代の話として、“女子は完全に無視しました”。数学の授業です。“できる男子または理系に進む男子に照準を合わせて授業を進めました。公立の3年間の授業では伸びる男子を伸ばすことを中心で私はやってきた”、そんな話をされました。

次は私の去年の夏の経験です。進路の先生がたくさん集まる会場で複数の公立の先生がこういう話をされました。“女子は答えない、手を上げない、だからあてない。女子の能力を伸ばそうというのは無駄”と、やっぱり男子を相手にしています。今でも共学校の中では、こういった状況がまだまだ残っているということです。

次は石田浩一先生、第2回にいらしてくださった、Z会で活躍されている数学の先生ですが、“女子の場合、数学に取り組まないのは不安があるからだ、自信がないからだ。それさえ解消すれば女子も伸びる”とおっしゃっています。

これはまた私の経験です。去年、公立の女性の校長先生が私の学校にいらっしゃいまして、“どうしよう。来年女子が増えるんだけど、せっかく進学実績が上がってきたのに、女子が増えたら進学実績下がっちゃう。女子は推薦を狙ってチャレンジしようとしなから”と、そんなことを仰いました。ここでもキーワードは不安と自信のなさの2つかと思います。

この3回を通してのテーマとして、中井先生の3回目の話にも、自己肯定感という話がありました。鷗友学園の前校長西川も、自己肯定感というのがこれから子供達を伸ばしていくときに大切なキーワードになってくるのではないかという話をしました。

そしておたとしまさ氏は、女子は横から目線、男子は上から目線という人間関係の違いというのがある。特に女子を伸ばすためには横の共感できる人間関係をしっかり作っていくことが必要になってくるのではないか、という話をされています。

これまで日本の社会は、あるいは日本に限らず国際社会の枠組みもやはり縦の関係の中にあるような感じがするのです。そして今もしも世界が、あるいは日本が硬直化しているとすれば、これまでの縦を中心とする社会の大きな枠組みというのを壊して、一回ちゃんと対等な人間関係というものから作り直していく、そういうところから始めなくてはいけないのか、そのために女子教育というのは実はすごく大きな役割を果たせるのではないかと考えています。

最初、女性がなぜ数学に不安を持っている、それをデータで示した典型的なものがPISAの、これは2012年最新のデータです。OECDがやっています世界的な学力調査で、最初の3つのグラフについては、第1回のときに中井先生がお示しになりました、読解力、科学的リテラシー、レベル6, 5に関しては読解力は女子が高く、科学的リテラシーは男子が高くなっています。この読解力が高いのは、これまでずっとそうでしたし、世界的にもそうです。科学的リテラシーでは、最初はそんなに差がついていなかったのが、最近またちょっと男子のほうが強くなってきているという状況が見られます。

それに対して数学的リテラシーに関しては、完全に男子のほうの上になっています。以前ですと、ここまでの差はなかったのですが、最近少し男子のほうの方がまた強くなってきている感じがいたします。

そして、2003の時には出てきたデータで、数学的リテラシーに影響を与える心理的要因—動機付けというのがありました。この項目は途中何回か抜けていたのですが、最新の2012にデータがあったのでグラフにしてみました。興味、関心や楽しいと感じる、道具的動機づけ、つまりやっておくと将来役に立つ、自分は数学ができるという自己効力感、そして自分に対する自信、自己概念の肯定、このような項目に関しては、圧倒的に男子のほうが強いという形になっています。“俺、東大にいくんだ”と平気で言う男の子、周りにたくさんいましたけれども、そのイメージです。それに対して女の子の場合は、どんなにできても“私、不安だ、数学に自信がない”、そう感じさせてしまう背景が学校の中にあるのではないかと、共学の学校の中にあるのではないかと私は感じています。

これは少し古いデータになります。1996年のデータで、5月1日に亡くなられたお茶の水女子大学名誉教授の天野正子先生などは、“もう古い。20年前の状況とは、男女共同参画などの影響もあって日本の教育は変わった”とおっしゃっているのですが、私は、大筋としては変わっていないんじゃないかなと思います。

このデータは、小学校のあるクラスで、先生が生徒にどのくらい働きかけ、生徒がどれくらい発言するかということについて、実際に何分間かの授業の中でチェックした膨大なデータの中からほんの1つだけ取ってきたのですが、決してこれは例外ではなく、様々な授業の中で、この様に男子のほうに先生とコミュニケーションしているというデータが出ておりました。小学校でさえ、こうなんですね。男子はものすごくしゃべる、女の子は黙っている。

私にも経験がありまして、ある塾で授業をしに来てくれと言われました。中学受験

の塾です。鷗友学園という女子校の教員が行きますから、女の子がたくさん集まってくれるかなと思いましたが、前に男の子がずら一と並んでいまして、普段の鷗友での授業のように“どう思う？”などと一言いうと、“はい、はい、はい、はい！”と男の子がすぐに手を挙げる。自分が当たらないと、我先に立ち上がって発言しようとするんです。女の子は後ろにいて“困った子たちねえ、あの子たち”と顔を見合わせている、そんな状態がたぶん小学校にはどこでもあるのではないかということ、このデータから感じています。

さらに中学校になります。一番上は“先生は授業中男子を良く当てるか、女子を良く当てるか”と聞くと、男子も女子も“先生は男子を良く当てる”と思っている。そして“授業中よく手を挙げる、発言する”では、女子に比べて男子のほうが多い。そして“先生は女子に甘い”、男の子には厳しくしっかりと勉強をさせて点数を取らせるけれども、女の子は出来なくてもいいやと言っている、そんな雰囲気がこのデータから見えてきます。“女だからこんなことをしちゃだめ” “男だから～しなさい”ということについても、4分の1程度の子が男子も女子も感じているというデータが出ております。ここもやっぱり男子の「雄弁」、女子の「沈黙」ということになりますでしょうか。

これもまた20年以上も前のアメリカのデータですので、日本には当てはまらない、あるいは古いという考え方もありますが、一番下にあります『「女の子」は学校でつくられる』という本の中から一部分を単純に羅列して簡単にまとめました。簡単にまとめましたから少し趣旨と違うところもありますが、かなりの部分が日本の学校にも当てはまるのではないかと思います。男の子には実験をさせ、女の子はメモを取ればいいよと言う。女子も最近、クラスの中で学級委員だったり、あるいは生徒会長になったりしますが、それが話題になるということは、やっぱり先生たちが男子にこそリーダーにいてほしいのに、女子が出ちゃった、そういう感じでとらえているケースが多いのではないかと思います。

ただ、やっぱり勉強法の違いについては考えておかなければいけないことがあるのではないかなと思っています。これは第2回でしたか、3回でしたか、桐光学園の先生の数学のお話の中で、こういう話がありました。これは一般論で、人によって違いがありますから、あくまで傾向として捉えてください。人間として変わりはないんだけど、こういう傾向が女子には強く、こういう傾向が男子には強く、やはりその傾向の強い女子の場合にはこうしたほうが良いという考え方です。女子の場合には1つ1つ知識をきちんと積み重ねていって、そして全体像が見えてきて“あ、答えにというケースが多い。途中を飛ばすと不安になるというのです。男の子の場合には、どちらかという、いくつかの知識をパツパツととらえてか“全体像はこうだよ、あ、じゃあこうなのかな”とすべてを分かっているなくても、全体像がわかっているれば解答に到達することができる、そういうケースが多いのではないだろうかということです。男の方がいい加減なのか、直感的なのか、女の子の方が論理的に詰めていくのです。

またつい先ほど、クラブの話でも、そういう傾向があるというお話がありました。

卓球の顧問をしていた先生が、女子の場合には、基礎的な練習をコツコツとやっていて、1つ1つ出来ていく過程で達成感を感じながら、自分が強くなったことを実感する。男の子の場合には、ボンと試合に出して、負けちゃった、これからはお前こうやればいいんだと、高い目標を持って頑張らせるところをきちんと目指しておけば、男の子の場合は基礎的な練習を1つ1つ積み重ねなくても頑張れるんだという違いがあるというお話をされていました。

今の学校の制度というのは、戦前の男子校の制度をそのまま共学の制度として、学習指導要領にしても男子の発達段階に合わせたカリキュラムが組まれていますし、大学で行われている教育学にしても男女平等を盾に、発達段階を無視して共通の、男子中心の研究が行われています。具体的に1つだけ例を挙げ言いますと、小学校5年生の時に比・比例・割合が出てくるのは、男の子がその時期に抽象化能力が伸びるからと言われています。女の子の場合には、その時期にコミュニケーション能力がさらに伸びていきます。その発達段階の違うところで女の子が男の子と同じ算数をやらされると、“やっぱり女の子は算数ができないのね”というレッテルが貼られてしまうことになるというケースが多いと思います。

理数が不得意になっていく理由としてということで、これは諸外国、様々な所で言われている話を全部、項目別に並べてありますので、1つ1つの出典は示していませんが、これまでのいろいろな先生方のおっしゃってきたことをまとめただけのものです。やはり女の子の場合には、さっき話をしました、横の関係性から人間関係ができ、その中で授業が行われていくことに慣れていく、男の子は縦の関係性の中で人間関係ができてその中で授業が行われていく。

そして、算数は女の子はできなくていいよという無言のメッセージがあちこちから刺さるように女の子に飛んでくるのではないかというイメージです。でも、理数が不得意になる出発点は発達段階の差、小学校の後半から起こってくる、特に抽象化の能力、あるいは体力というものが、男の子中心の今の学校制度の中で、女の子をそのようにしている理由になっているのではないかということです。

それに対して、これは鷗友学園の教員の態度です。女の子に対して、女の子だからこうしなさい、女の子のくせにこんなことをやってということ「ほぼ」を入れるとほぼ100%という教員集団の中で女の子が育っていくのです。ジェンダーフリーという言葉もありますけれども、私たちはジェンダーニュートラルという言葉を使い、特に大切なのは自己肯定感、女性である自分が女性でよかった、いや、女性か男性かに関わらず、今、私はこれでいいんだと自分で言えるような状態を作っていくことが、学校の中で絶対に必要なのだと考えています。

そのためにはこんなことをやったらどうかと、2010年の教員研修会で話し合ったことです。子供たちの自己肯定感を高めていこうという取り組みを5年間やりましたところ、ある程度、鷗友学園の自己肯定感は高くなりました。2009年の自己肯定感、高いところが約30%、中位が40%、下位が30%。これは先ほど出てきました千葉大学の明石先生に採っていただいたデータですが、その後4年間、自己肯定感を高める

取り組みをしていった結果として、2013年のデータですとその平均値が10ポイント、高い方が多くなりました。

こういう中で子供たち一人ひとりが女子校の中で自己肯定感を高めながら前向きに取り組んでいくということが、一人ひとりの能力を確実に伸ばしていくのだということをお私たちは感じながら、日々の教育を行っております。

ここからは一般的な話になりますが、先ほど小学校、中学校、高等学校のつながりという話がありました。小中一貫教育を最初に文部科学省が考え出した頃のデータは、小学校のデータが二段ほど低かったのです。3分の1くらいの低さで、いじめは小学校では少ないけれども、中1で急に多くなる。だから、その中1で急に多くなる変化を解消するために小中一貫校を作らなければいけないのだという論拠の一つ基になったデータですが、最近は小学校でも把握される数がどんどんと増えてきて、決して小学校と中学校は極端に差がある状態ではなくなっています。ただ、やっぱり中学1年生でいじめが多くなって、だんだん少なくなっていく傾向に変わりはありません。

女子校で教育していてよく聞かれるのは“女子校は陰湿ではありませんか” “女子校にはいじめが多くありませんか”と、そういう質問です。でも、データから見る限り、逆ですよ。データでは男子校の方にいじめが多いのです。何故でしょうか。単純に言うと、女子の集団は小さな集団で秘密の共有が行われていて、外にその中で行われていることが見えにくいのです。男の子の集団というのは、ボスがいてフォロワーがいて一番下にパシリがいて、縦の大きな集団でいつも動いていて、パシリの子はいつもパシリをさせられていますから、先生から見えやすいのです。だから男の子の集団のいじめの把握数は多いというようにいわれています。

一方で、加害児童生徒数、暴力をふるって周りに傷をつけたりする子のデータは、御覧のように圧倒的に男の子の方が多いことがわかります。とくに中学の3年間においてですが、これはたぶん中高一貫教育をしている意味があるという一つの理由になります。これはあくまでも仮説ですが、中学の段階における高校入試のストレスが多分ここにきているのだらうということです。ここでの男子と女子の違いについて、鷗友学園創立当時の校長が“女子校の教員は小児科医であれ”言いました。女子の場合には色々なストレスを心の中に閉じ込めてしまって、カウンセラーや精神科医にお世話にならなければいけないケースが実は多い。男子の場合にはそれを外から見える形で発散できる、だから男子は暴力行為に走り、女子はそれを抑えて表面的にいい子でいるけれども、内面の心の動きをしっかりと受け止めてあげないと本当はすごいストレスを溜めている、それがこの言葉になっているかと思います。

先ほどからお話をしています、男子と女子のその仲間作りの違いですが、中学1年生、高校1年生の4月の最初時に席を決めますが、大体先生の方の都合で名簿順で1ヶ月くらい同じ座席の学校が多いですよ。男の子の場合にはすぐ立って歩いてあっちこっち行って、何かアイテムを中心に、鉄道だとかゲームだとかを中心にみんなが集まり、会話が無くてもアイテムに夢中になっていれば仲間意識が高まります。知識があったり、物を持っていたりして縦関係の大きな集団ができ、互いに少しでも相手の

上に出ようと競い合います。一方、女性の方に伺うと、今でも付き合っている親友は割とその最初に座った席の周りの名簿の近い人が多いとうなずかれる方が多いです。女の子は立ち歩かず、座席の周囲に小さな集団を作り、お喋りをして友達になる、互いの関係性を大事にする横関係の集団で秘密を作る、それが男子と女子の絶対的違いです。

お互いを知り、“そうだよね”、と主語なしに語り合えるような、うなずけるような関係性、それを親密圏と呼びます。それに対して、パブリックスピーキングをしなければいけない場を公共圏と呼びます。男の子場合は一つのクラスに放り込んでも最初から親密圏が大きいからです。公共圏が最初からほぼ重なりますが、女の子の場合、小さな親密圏がたくさんできるので、向こうで発言している子が何か言っていると、“嫌よねあの子”と、内輪で遠くを批判し、それがさざ波のように広がる、“やっぱり発言しなければ良かった”ということになってしまいがちです。

そこをなんとか工夫し、女子の集団の親密圏と公共圏を重ねていくことによって、どんどん交際の範囲、コミュニケーションの範囲を広げていくことができると、女子の場合のいじめもなくなります。内にこもることもなくなり、内輪だけではなく、皆がお互いに違いがあってもぶつかり合っても、認め合いながら共通の場で一緒に話し合いをして人格を否定せずに意見をちゃんと言い合い、そして、最終的には一緒に何かをやっていける関係性ができます。例えば価値観が違って文化が違って、歴史観が違って一緒に何かをともにやっていける、新しい世界を作っていける、そういう人材を女子校の中で作っていけるのではないかなと考えているのです。

そのために少人数のクラスで3日に一回席替えをする。3日に一回席替えをすることで1ヶ月もすればクラス全員と話した事になり、小さなグループの中で“そうよね、嫌よね”ということにならず、遠くで発言したことに対してわかったという風にお互い理解できる関係性をクラス全体で作っていくことができるのです。この女子の小さくまとまるというマイナスに捉えていたことを逆に利用しながら、横の関係がもっともっと広がって行って、クラスを越え、学年を越え、学校を越え、国境を越えて世界の人と対等な関係で、価値観が違って一緒に活動できるという存在になっていくのではないかと考えています。

また、女子の場合にはどうしてもできる子を抜こうとしない、遠慮して引っ込んでしまうことがあると言われます。しかし、横の関係性を前提に、お互いわかりあって認め合い、私もあなたも大事な人間であるとわかり合った上であれば、お互い励まし合って足を引っ張らなくなる。安心して皆がんばれる集団が自律的にできていきます。コミュニケーション、居場所、自己肯定感というのが女子の集団に生まれてくると、非常に強い集団になるのではないかと考えています。

中学1年生には毎月お誕生日会というのを開いて子供達に集まってもらい、色々な話をシュークリームを食べながらしています。今年の4月、5月に、中学1年生に“なんで女子校に来たの”と聞いて、その答えの中のいくつかを羅列しました。さきほどの工藤先生の話とは逆で、“男の子うざい”、なぜか、“意見を聞かない”、“騒ぐ

ばかりでちゃんとした意見を言わない”、“私たちは同じ立場でちゃんと意見が言い合える関係でよかったよね”と、少なくとも中1の段階では言っています。

ただこの先が、これから問題になっていく部分だと思います。これは京都大学の溝上慎一教授による図です。いま、新しい教育が話題になっていますが、2020年を目処に大きく変化する、変化しなければならないと言われていています。そこで一番大きな問題になるのは、これまでのように対課題能力、すなわち一つの知識を覚えてそれを点数化するという1対1対応の知識を持っているだけではだめだということです。これからの社会の中で活躍できる人材とは、全く違う価値観を持つ人とコミュニケーションをきちんととりながら、ぶつかり合いながらも、でも一緒に何かを作っていくことができる能力、しかも周りに流されずに自分自身がこういうことをやりたいという自分の意志、主体性をしっかりと持っていること、この3つの大きな軸というのが大切になってくるということです。コミュニケーション能力そして主体性、これがアクティブラーニングがキーワードになっている背景にある大きな社会の変化だと思います。

先ほどの話に戻りますが、図のように、女子は先生から言われたことをきちんとやってきたため、20世紀型、銀行型の能力に長けてきたと考えられます。しかしこれからは、1対1対応の知識だけではなく、それを応用しながら一緒に新しいものを作っていくということが大切になっていきます。どちらかというところこれまでの積み重ね型の女性より、やったるで型の男性の方が役に立つように見えます。ただし、女子校の中でも知識の積み重ね型からの転換を図り、もともとコミュニケーション能力をしっかりと持っていますから、学び方を変えていけばこれからの女性はぐんぐん伸びていくはずですよ。

例えば英語の授業では **All English** で行われていて、最初の時間からすべて英語で始まります。一切日本語を使いません。“わからなくていいんだよ”というところから始め、100万語を目標に中学3年間でたくさんの文を読み、聞きながら、一つ一つ自分でわかっていく、という授業を展開しています。わからない単語を辞書で引くなどという1対1対応の知識を覚える科目ではなく、コミュニケーションのための実技科目という立場で授業が展開されます。まず絵を見て、状況を把握して、全体を理解して、どういう会話がそこで成り立つかを考え、そこで見た、聞いた単語を、文を実際に自分で束手見ましょ。もし、違っていても、周りの人に修正してもらいながらだんだんわかっていけば良いのですから。これは先ほどの21世紀型の学力と対応すると思います。

保護者に対して、家庭でこういう事をしないでくださいとお願いしています。授業を100パーセント分かったから次に進むという勉強のやり方ではなく、細かいところがわからなくても、全体が見えれば良い、みんなで一緒に話し合いながら分かっていく、日本語に訳さず、英語を聞いて、英語で考え、英語で話し、つまり日本語を介さずに英語脳を養う、そういう授業のやり方をしてきました。

この英語のやり方は10数年前から始めましたが、それが生徒の中に定着していく

中で、例えば私は社会科ですが、以前は、“先生、だから答はなんですか”と、一つの答を求めていた生徒達が、最近ではこういう立場であればこういう答が出て、こういう風に考えればこういう答が出る、社会科、一般に暗記科目とよばれるものでさえ、一つの答のない問い答を共に考えていけるという変化が表れてきています。

最後に日本の女子校と男子校の両方を訪れたイギリスの方が、男子校、女子校それぞれ特徴があって、女子校には女子校の良いところがあるという話をしてくれました。決して男子校が悪い訳じゃなくて別の意味で良いところがあるんですが、女子校の立場からまとめてあります。ここで言っていることをプラスマイナスを逆転させれば、男子校の良さも見えてきます。それを一つにまとめていくと、共学の中ではひょっとしたら抑えられていた女子の能力をしっかりと伸ばし、あるいは男子の能力をしっかりと伸ばし、互いに伸ばした能力を寄せ合ってこれから社会を一緒になって作っていくことで、これからの日本の活力にしていけるのではないかと考えます。